[移動領域]補語の助詞標示の変遷―非制御的な移動動詞を中心に―

山下大希（名古屋大学大学院生）*

1. 問題の所在

以下の(1)～(3)の動詞はどれも「移動」を表す動詞でヲ格補語が「移動の経路」を表すという共通性を持つ。この「移動の経路」を「広義経路」と呼んでおく。なお、(1)～(3)の分類は加藤(2006)に基づく。

		移動		ヲ格
(1) のぞみ号が新横浜駅を通過する。	[通過点]	：移動行為の範囲	>>>	移動域(極小)
(2) 永代橋を渡る。	[移動経路]	：移動行為の範囲	＝	移動域
(3) 校庭を走る。	[移動領域]	：移動行為の範囲	＜	移動域

古代日本語の場合、上記の(1)[通過点]・(2)[移動経路]はヲ格で標示されていたが、(3)[移動領域]はニ格で標示されていたことが指摘されている(松本 2020)。なお、[通過点]・[移動経路]は移動する経路の境界線(＝有境界性)が明確である――起点・着点が明確である点で、領域の内部の移動を意味する[移動領域]とは性質を異にする(加藤 2006)。つまり、古代日本語の段階では、有境界性が明確な「経路」にのみヲ標示がなされていた。

松本(2020)によれば、[移動領域]のうち、「走る、歩く、駆ける」などの制御的な移動動詞の場合は鎌倉期から室町期にかけてヲ標示が拡張し、確立した。他方、「流れる、さ迷う、漂う」などの非制御的な移動動詞の場合は室町期においてもニ格標示のみ見える、とされる。

なお、本発表での[±制御性]は「動作主が意図的に事象を制御可能か否か」という意味である(影山(1993)及び三宅(1996)における“CONTROL”の意味的規定に準じる)。

現代語に話を戻すと、(4)に示すように非制御的な移動動詞の[移動領域]補語もまた助詞ヲで標示される。すなわち、室町期以降のどこかの時点で、非制御的な動詞の場合にもヲ標示が拡張したと見えるが、いつ・どのように拡張したのかは詳らかでない。

(4)　桃が川を流れる。/ 太郎が森をさ迷う。/ 流木が海を漂う。

さらに、現代語の助詞ヲ標示は述語動詞の[±制御性]が重要な役割を果たすとされることもあり、そのような前提のもとでは(4)の助詞ヲ標示は例外的とされる(三宅 1996)。しかし今見たように、少なくとも室町期までは(4)のような例外は見えなかった。このようなある種の例外がどのようにして発生したのかを分析することは、現代語共時態の分析にも資するところが大きいと考えられる。以下、「経路」における助詞標示の変遷を「非制御的な移動動詞」を中心に分析していく。

2. 「経路」における助詞ヲ標示の拡張

* yama421shita@icloud.com

2.1. 概略

本研究の主題に移る前に、大まかに、松本(2020)によりつつ、中古～中世における「経路」補語の助詞標示の変遷を確認しておく。表 1 には併せて本発表で仮定する助詞標示の変遷を示す。上代～中世の状況に関しては、松本(2020)に基づいて示し、近世以降は、本発表での調査に基づく。以下、特段の理由がなければ、[通過点]・[移動経路]の有境界性が明確な 2 つを「狭義経路」と呼び、[移動領域]とは分ける。以下に見るように、本発表の対象とする非制御的な移動動詞の[移動領域]補語へのヲ標示は近代になって拡張し、確立する。

表 1	狭義経路	移動領域(制御的)	移動領域(非制御的)
上代～中古	ヲ	ニ	ニ
中世(鎌倉)	ヲ	ニ→ヲ	ニ
中世(室町)	ヲ	ヲ	ニ
近世	ヲ	ヲ	ニ(→ヲ)
近代	ヲ	ヲ	ニ→ヲ
現代	ヲ	ヲ	ヲ(ニ)

2.2. 中古から中世にかけての「経路」の助詞標示

2.2.1. 中古

中古においては、有境界性が明確な[通過点]・[移動経路]の用法に限って、助詞ヲ標示がなされていた(松本 2020)。以下の「経路のみを承ける動詞」は、「通る、越ゆ、過ぐ、渡る、上る、行く、下る、帰る」、「移動領域と経路を承ける動詞」は、「歩く、走る」、「移動領域のみ承ける動詞」は、「駆ける、漂ふ、流る、さまよふ」である(松本 2020：pp. 20-21)[1]。以下、松本(2020)の整理を引用する(p. 28、表 7)。

	を	に	より	へ	係助詞副助詞	無助詞
経路のみを承ける動詞	経路	着点	経路 着点	着点	経路 着点	経路
移動領域と経路を承ける動詞		移動領域 起点	移動領域 起点		移動領域 着点	移動領域、経路
移動領域のみ承ける動詞		移動領域	移動領域			

加藤（2006）は、現代語におけるヲ格補語の用法を分析する中で、他動詞の直接目的語を標示する「対象格」と「広義経路」とが、[通過点] をハブとして連続的に関係づけられることを指摘している。例えば、(5) の「第三ゲート」は、「突破」の対象であると同時に、「突破」によって通過される場所でもある（加藤 2006：177-178)。

(5) 第三ゲートを突破する。(加藤 2006：146、例(41))

このような性質は、[通過点] が「有境界性」を明確にもつという特徴に由来する。すなわち、始点と終点が明確であるために、対象として把握されやすいのである（加藤 2006：177-

[1] 松本(2020)の「経路」は、[通過点]・[移動経路]の双方を含む。

178)。[移動経路] についても同様であり、この意味で、有境界性の明確なものは「対象性」を帯びるといえる。さらに、「家を離れる」などの［離点］もまた、同様の性質を有すると考えられる（加藤 2006：177)。このことから、中古語において助詞ヲが標示されたのは、加藤の論述を踏まえると、「有境界性」が明確な場所補語の場合、すなわち他動詞の直接目的語を標示する対象格と「対象性」という意味的な連続性をもつ場合に限られていた。

2.2.2. 中世

松本(2020)によれば、「歩く、走る、駆ける」は、鎌倉、室町期にかけて、狭義の「経路」のみならず[移動領域]にも助詞ヲ標示が拡張した。鎌倉期には、ニ格とヲ格が[移動領域]補語の標示に使用されているが、室町期に至って、[移動領域]の標示に助詞ニが使用されることはなくなり、助詞ヲのみで標示されるようになる。松本は、次のように考察する。

> 「を」が進出した「歩く」「走る」「駆ける」は、移動の様態を表す動詞であると言える。これらの動詞は、移動行為そのものを言い表す場合には、様態が背景化され、経路を明示することができる。そのため、もっぱら経路を表す「を」とも共起し、その「を」が移動領域の標示をも担うようになったと考えられる。一方、「さまよふ」「漂ふ」「流る」は、着点を自ら決定することのない統御不能な移動動詞であると言える。そのため、着点にたどり着くための経路を取ることもなく、経路を表す「を」と共起することもない。(p. 30)

つまり、制御(＝統御)的な移動動詞は、着点を自ら決定し得るために、[移動経路]として把握され、そこからヲ標示が可能になり、最終的に[移動領域]そのものの助詞ヲ標示が可能になった、という道筋である。

さらに、先の加藤(2006)を踏まえると[移動領域]は有境界性が不明確であり、その意味でヲ格項は「対象」として把握されづらい。他方、制御的な移動動詞に限定される点では、他動詞の直接目的語標示である「対象格」の用法と共通性を持つとも言える。つまり、この段階の[移動領域]は、動詞の[+制御性]という他動詞の意味との連続性と「狭義経路格」との意味的連続性に基づいて助詞ヲ標示が行われていたと言える。言い換えると、この段階の[移動領域]の助詞ヲ標示は、「対象格」との関連性を持つ。他方で、次に見る非制御的移動動詞の[移動領域]補語へのヲ標示は、「対象格」との関連性を持たない。

3. 非制御的移動動詞における[移動領域]補語の助詞標示変遷

3.1. 概略

松本(2020)では、非制御的な移動動詞「流れる、さ迷う、漂う」は、室町期に至っても[移動領域]が助詞ニで標示されているという観察が示されていた。本発表では、「日本語歴史コーパス(CHJ)」と「昭和・平成書き言葉均衡コーパス(SHC)」を用いて、この三語の助詞標示の変遷を観察する。検索にあたって、短単位で「語彙素」としてそれぞれ「流れる、さ迷う、漂う」をキーとした。検索結果を目視で確認し、助詞標示を確認した。なお、「てくる、ていく」などの格体制に変化を与えるテ形を承接する場合や複合動詞などは除いている。以下、初出例と用例数が増大する年代を示す。

(6)**流れる**：19 世紀末からヲ標示が急速に拡張(※初出例は 18c 末の下記)

（初出例）其氷ノ下ヲ水ノ流レルヤウニ外ヘハアラハサズニ(52-遠鏡 1793_00212)

(7)**さ迷う**：20 世紀前半～中盤にヲ標示が拡張(※初出例は 19c 末の下記)

（初出例）偶には神明邊を逍遙て見ると(60M 太陽 1895_10029)

(8)**漂う**：20 世紀後半～現在にかけてヲ標示が拡張(※初出例は 20c 初頭の下記)

（初出例）香ばしい栗の香は爐を廻つて一室を漂よふなつかしい栗の匂(60M 女世 1909_16054)

3.2. 調査概要

先に見たように、「流れる」は他二語と比較して、[移動領域]への助詞ヲ標示が早期に許容されている。ただし、ニ標示をヲ標示が上回るのは、CHJ 範囲内では 19 世紀末になってからである。以下、1870 年以降に限定して、[移動領域]への助詞標示がニでなされるか、ヲでなされるかを確認する。1870 年以降に限定するのは、CHJ の範囲内では、「さ迷う」「漂う」は、1890 年以降が初出であり、「流れる」に関しても (6) の例に加えて『遠鏡』中にもう 1 例ヲ標示が見えるのみで、次に確認されるのは 1870 年に至ってからであるためである。

表 2～4 の見方を説明しておく。[移動領域]が助詞ニで標示される場合は「ニ」、助詞ヲで標示される場合は「ヲ」としてそれぞれ区別した。「全」は、[移動領域]補語を取らない場合も含めた総例数を示す。なお、「1930-1939」「1940-1949」の区分は、CHJ と SHC で年代が重なるため、「CHJ|SHC」として用例数を示した。また、各行では、その時期において多数を占める助詞標示に網掛けを施している。

論述の都合上、表 3・表 4 から概観する。表 3「さ迷う」の場合、1890 年頃にヲ標示の初出が見え、その後 1900 年頃からヲ標示が増加傾向にあり、1950 年以降にはヲ標示が主流となる。他方、表 4「漂う」は 1900 年頃にヲ標示の初出が見えるが、1989 年までの間、ニ標示を上回ることはなく、[移動領域]補語への助詞ヲ標示は極めて遅れて確立する。表 2「流れる」については、他の二語よりも早く、1890 年頃にはニ標示をヲ標示が大きく上回る。すなわち、「流れる→さ迷う→漂う」の順に、[移動領域]補語への助詞ヲ標示が拡張していったと考えられる。なぜこの順に拡張していったのかについては、4 節で改めて考察する。

ただし、表 2「流れる」に関しては、1939 年までは明らかにヲ標示がニ標示を上回っているのに対し、1940 年代以降は、逆にニ標示がヲ標示を上回っている。この変化については、何らかの説明を与える必要がある。詳細は論じえないが、その要因として述語の形態的特徴に着目する。表 5・表 6 に示すように、1940 年以降、[移動領域]がニ標示される例では、ヲ標示される例に比べて、述語が「シテイル」形で現れる割合が高い。この点が、1940 年代以降にニ標示が優勢となる一因であると考えたい。現代日本語においては、「*池に鴨が泳ぐ／池に鴨が泳いでいる」のように、「スル」形では不適格な場所ニ格が、「シテイル」形の場合には許容されることが知られている（野村 1994、福嶋 2006)。すなわち、このような「存在様態」の「シテイル」の存在が、1940 年以降に[移動領域]補語へのニ標示が増加した一因である可能性を示唆する。

表 2「流れる」[2]

	ニ	ヲ	全
1870-1879	4	2	26
1880-1889	2	3	60
1890-1899	10	28	235
1900-1909	24	43	358
1910-1919	7	24	204
1920-1929	19	27	202
1930-1939	16 [2|14]	39 [1|38]	190 [23|167]
1940-1949	37 [2|35]	41 [13|28]	280 [70|210]
1950-1959	39	26	200
1960-1969	30	18	191
1970-1979	22	23	193
1980-1989	54	61	593

表 3「さ迷う」

	ニ	ヲ	全
1870-1879	0	0	0
1880-1889	0	0	0
1890-1899	4	1	6
1900-1909	2	7	14
1910-1919	3	1	9
1920-1929	6	7	15
1930-1939	5 [2|3]	7 [1|6]	13 [4|9]
1940-1949	3 [0|3]	2 [0|2]	6 [0|7]
1950-1959	1	5	12
1960-1969	0	9	11
1970-1979	1	9	16
1980-1989	1	20	33

表 4「漂う」

	ニ	ヲ	全
1870-1879	1	0	4
1880-1889	13	0	15
1890-1899	16	0	25
1900-1909	34	1	36
1910-1919	37	1	55
1920-1929	26	1	37
1930-1939	37 [5|32]	1 [0|1]	55 [8|47]
1940-1949	56 [8|48]	1 [0|1]	89 [11|78]
1950-1959	32	1	48
1960-1969	20	1	44
1970-1979	25	4	53
1980-1989	48	5	111

表 5. 「ニ+流れる」の「シテイル」形の割合

	シテイル形	全体	割合
1870-1879	0	26	**0%**
1880-1889	0	2	**0%**
1890-1899	0	10	**0%**
1900-1909	0	24	**0%**
1910-1919	3	7	**42%**
1920-1929	2	19	**10%**
1930-1939	4 [1|3]	16 [2|14]	**25%**
1940-1949	22 [1|21]	37 [2|35]	**59.5%**
1950-1950	24	39	**61.5%**
1960-1969	18	29	**62%**
1970-1979	12	22	**54%**
1980-1989	25	54	**46%**

表 6. 「ヲ+流れる」の「シテイル」形の割合

	シテイル形	全体	割合
1870-1879	0	2	**0%**
1880-1889	0	3	**0%**
1890-1989	0	28	**0%**
1900-1909	7	43	**16%**
1910-1919	8	24	**33%**
1920-1929	1	27	**3.7%**
1930-1939	16 [0|16]	39 [1|38]	**41%**
1940-1949	15 [7|8]	41 [13|28]	**36.6%**
1950-1950	12	26	**46.2%**
1960-1969	3	18	**16%**
1970-1979	7	23	**30%**
1980-1989	21	61	**34.4%**

4. 考察：拡大の要因

4.1. 「ヲ格補語の経路性」の影響

3 節では、「流れる→さ迷う→漂う」の順に、[移動領域]ヲ標示が拡張していったことを確認した。特に「流れる」は、18 世紀末には既に[移動領域]と判断される例が見える点で「さ迷う、漂う」よりも極めて早い。では、なぜ、「流れる」が他二語に先行したか。

松本(2020：注 15)では、「流れる」について、鎌倉期に起点「より」が 1 例、室町期に起点「から」が 2 例、着点「へ」が 1 例見られることが報告されており、そのうえで、「流れる」という移動には一方向性があり、それが前面に出た結果として「経路」として捉えられ、起点や着点と共起するようになったと説明する。松本(2020：注 15)の指摘するように、中世期には既に「流れる」の経路補語に有境界性を持つ用法が存在している。

(9) 夜の御殿に参りたれば、御帳の中より血流れたり。(30-宇治 1220_06009)

[2] なお、「流れる」は[移動経路]か[移動領域]かの区別がつきがたいため、ニ・ヲの場合双方とも「広義経路格」と判断される場合には用例としてとった。

(10) 山のいもが川へながれて、それがうなぎに成と申(40-虎明 1642_04016)

ただし、1 節で確認したように室町期には「流れる」の補語に対するヲ標示は見えない。本発表の調査範囲内では(11)がヲ標示の初出例であり、文脈的に「果(て)」が明示されていることから、この「板敷山の北を」は[移動経路]の用法であると判断可能である。この「狭義経路」から派生して、(6)に示したような[移動領域]へと拡張したのだと考えられる。

(11) 板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入 (51-芭蕉 1694-01033)

つまり、「流れる」の[移動領域]へのヲ標示は「経路性」を基にして拡張したと見え、これが「流れる」の経路補語へのヲ標示が他二語に先行した理由であると考えられる。

4.2. 「ガ格補語の有生性」の影響

このように 19 世紀末に「流れる」において[移動領域]へのヲ標示が拡張・確立する中で、「さ迷う」の[移動領域]もヲ標示がなされるようになる。他方、「漂う」はヲ標示も少しずつ見えるが、ニ標示が調査範囲内では常に優勢である。では、この「さ迷う」と「漂う」の差は何か。本発表では、主語の「有生性」における差が影響を与えている可能性を考えたい。

「さ迷う」のガ格には、基本的には有情物が現れる。大雑把な調査になるが、調査範囲内での「さ迷う」のガ格項目を確認しておくと、「有情物：非情物＝86：11」であった[3]。ここで、中世時点での「経路」の助詞ヲ標示の特徴を再確認しておくと、[移動領域]は、[+制御性]という他動詞との意味的な共通性と、[通過点]・[移動経路]との意味的な連続性とによってヲ標示が許容されていた、と見得る。

「さ迷う」の助詞ヲ標示が「漂う」に比較して先行したことは、既に「流れる」において非制御的な移動動詞の[移動領域]補語に助詞ヲ標示が可能になりつつあったという背景と共に、「さ迷う」のガ格項が基本的に「有情物」であることにより、「走る、歩く」などの制御的な移動動詞の[移動領域]補語の助詞ヲ標示とも類推されやすかったことが影響していると考えられる。

4.3. [移動領域]そのものへの助詞ヲ標示の拡張

「漂う」のヲ格補語は「経路性」も持たず、またガ格補語には「有生性」の制約がない。即ち、「漂う」の場合は、既存の「対象格」や「狭義経路格」との関連が希薄であり、その[移動領域]へヲ標示が拡張される契機がない。表 7 に三語の意味の比較を示そう。着目するのは、「ヲ格補語の経路性」と「ガ格補語の有生性」である。

---

[3] 「さまよう(さ迷う・彷徨う・徘徊)」の語釈として『日本国語大辞典 第二版』(小学館)には「(1)気持ちが定まらなかったり迷ったりして、あたりを歩き回る。(略)。(2)はっきとした目的もなく、あちこちを歩く。(略)。(3)ある場所にはっきりと固定しないで、あちこち動く。(略)。(4)気持ち、決心などが定まらないでいる。」があげられる。(3)は「樹間の靄が暫く乱れて雲の如く小迷ふ」(小栗風葉、「青春」、1905~1906)のように「雲や靄などがただよう」といった意味があるとされる。このような場合、「非情物」がガ格に立つが、他の用法は「有情物」ないし「〈有情物〉の気持ち/心」がガ格に立つと言える。

表 7	流れる	さ迷う	漂う
ヲ格補語の経路性	+	−	−
ガ格補語の有生性	−	+	−

このように、「漂う」は中世までの用法との関連性を持たないため、「漂う」にヲ標示がなされるには、既存の用法と連続性をもつ「流れる」「さ迷う」など、他の非制御的移動動詞における［移動領域］補語への助詞ヲ標示の拡張を待たねばならなかったと考えられる。したがって、「漂う」への助詞ヲ標示の拡張は、「流れる」や「さ迷う」に比して遅れたと見ることができる。視点を変えれば、現代語においては「経路性」や「有生性」といった制約によらず、「助詞ヲ＝移動領域」という図式が完成しつつあるといえる。

5. まとめ

本発表では次のような助詞ヲ標示拡張の過程――とくに③以降の過程を示した。

(12)　「広義経路」における助詞ヲ標示の拡張過程

① 中世以前：[通過点]・[移動経路]のヲ標示(松本 2020)

② 鎌倉～室町：制御的動詞の[移動領域]のヲ標示(松本 2020)

③ 近世（17c 末）：非制御的動詞「流れる」の[移動経路]にヲ標示

④ 近代（19c 末）：同「流れる」の[移動領域]へ急速に拡張

⑤ 近代（20c 前～中）：有情主語を取る非制御的動詞「さ迷う」の[移動領域]へ拡張

⑥ 近代～現代：非制御的動詞「漂う」の[移動領域]へ拡張

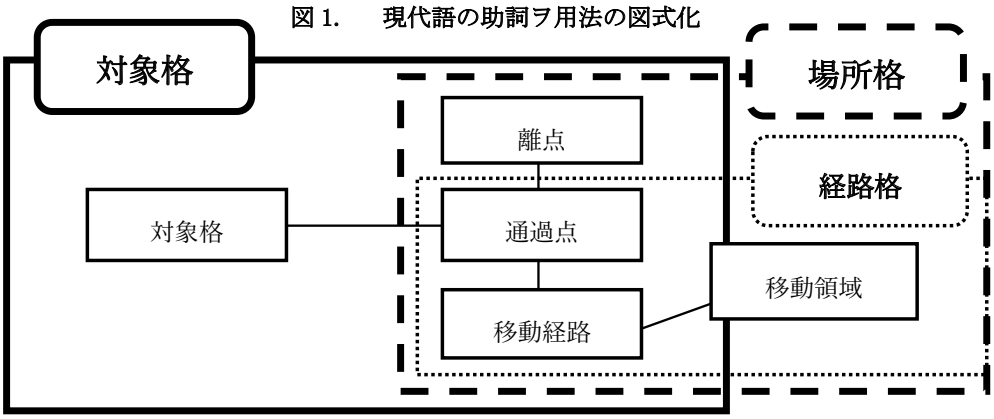
助詞ヲの用法は、歴史的に徐々にずれ、現代語においてはもはや「対象格」との関連性を持たない用法まで出現している(⑥の段階)。このような変化の過程を俯瞰すると、非常におおまかではあるが、次のような体系的把握が可能である。すなわち、中古におけるヲ格補語の体系が「対象格」中心のシステムであったとすれば、現代語では「対格」と「場所格（経路格＋離格)」という二つのシステムが併存し、その重なりの部分に［移動経路］や［起点］といった用法が位置づけられることになる。[4]

冒頭に述べた三宅（1996）の指摘する「例外」は、このような用法間の緩やかな連続性に基づいて生じたものと、通時的には理解される。このような通時的展開は、共時的な位置づけと必ずしも一致する必要はないが、共時的分析を裏づける一つの傍証として位置づけることができる。

---

[4] 近代期には「腹を立(た)つ」などの「ヲ+自動詞」の用法が消滅していったことが指摘されている(鈴木 1985)。他方で、本発表で扱った移動動詞は、同時代に「ヲ+自動詞」の用法が拡張していったという点で興味深い。また、「吹雪の中を遭難者を捜索する」のようないわゆる「状況ヲ」の用法も 19 世紀後半～20 世紀前半になって目立つ(発表者調査：cf. 山下 2025)。[移動領域]を伴う動詞群は、佐藤(2025：p. 25)でいうところの「B 群」、すなわち、ヲともデとも共起する移動動詞である。この動詞群は、奥田(1983)の「移動動作を様態という観点からとらえている」(p. 141)ものとほぼ重なる。つまり、デ格とヲ格が重なる領域にある移動動詞群であるといえる。[状況ヲ]の確立という観点からもこの時期は興味深い。

図 1.　現代語の助詞ヲ用法の図式化



【使用コーパス】

国立国語研究所(2025)『日本語歴史コーパス』(2025 年 7 月 31 日確認)

小木曽智信(他)編(2023)『昭和・平成書き言葉コーパス』(2025 年 7 月 31 日確認)

【参考文献】

小木曽智信・近藤明日子・髙橋雄太・間淵洋子編(2024)「『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開」『情報処理学会論文誌』65-2

奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

加藤重広(2006)「対象格と場所格の連続性―格助詞試論(2)」『北海道大学文学研究科紀要』118.

佐藤友哉(2025)「経路を表す「を」格の対象性」『清泉女学院短期大学研究紀要』43.

鈴木英夫(1985)「「ヲ+自動詞」の消長について」『國語と國文学』62-5.

野村剛史(1994)「上代語のリ・タリについて」『國語國文』63-1.

福嶋健伸(2006)「動詞の格体制と～テイルについて―小説データを用いたニ格句の分析―」矢澤真人・橋本修(編)『現代日本語文法　現象と理論のインタラクション』ひつじ書房.

松本昂大(2020)「中古和文における移動動詞の経路、移動領域の標示」『日本語の研究』16-3.

三宅知宏(1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110.

山下大希(2025)「日本語史における[状況ヲ]の確立メカニズム」全国大学国語国文学会、令和 7 年度夏季第 131 回大会、於二松学舎大学.

謝辞

本研究は、JST　次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125(受給者：山下大希)の財政支援を受けたものです。